

稱讚

一三二二号

二〇二二年三月一日発行



「青い胡蝶蘭」の花言葉：愛・尊敬

「春一番」心から和める春が望まれるのですが、COVID19の終息の兆しが見えないどころか、世界中が憂う戦争が起こっております。
「兵戈無用」「戦争反対」を呼び続けながら、密を避けていきましょよう。

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺
〒二二一〇〇七五
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
TEL 〇三―五二四二―二〇二五
FAX 〇三―五二四二―二〇二六
HP shousanjii.com

すべての者は暴力に怯える。すべての生きとし
生けるものにとって生命は愛しい。

己が身にひきくらべて、

殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ。

『法句経』（ブツダの真理のことば）より

三月十一日、東日本大震災から十一年を迎えます。あらためて被災、犠牲に遭われた方々に追悼の意を表します。あらためて自然災害はその後も日本中で、世界中で頻繁に起こっており、これからも確実に起こると警鐘を鳴らし、人々に備えを呼びかけております。また、新型コロナウイルス感染も未だ終息の目途が立たず、人々は疲弊しております。しかし、私たち人間は、自然災害に対しては、殺戮の武器を使つての報復という思いは抱くことはありません。

戦争は人間による災害であります。「三災七難」と言われる中に、「戦争」は含まれていて、この世界で、太古から止むことなく起こっております。お釈迦さまは「兵戈無用」と言われましたが、武器が軍隊が無くなるどころか、益々威力が増しております

今、ロシアのウクライナ侵攻が報道されています。ロシアのプーチン大統領は、自分の「正義」？(NATOから自国を護る。ウクライナの親ロシア派を護る)を掲げておられますが、二〇一四年のクリミア半島の占領で、現政権への支持率が九〇%を越えたことから、更に政権を延長するために国民の支持を得ようとの策略で一方的に戦争を起したと思えません。

当然、世界中の人々が、プーチンを批判し、戦争反対を叫んでおります。

侵攻が始まったとき、何気なく、ニュースを聞いていたら、モスクワの人が、「仕方がない」と言った言葉が耳に残りました。日本が戦争した時も、この「仕方ない」がまかり通っていたのではないかと思いました。ロシア内でもロシア人も戦争反対の訴えが広がっているのは事実ですが、プーチン政権は「聖戦」として侵攻を続け、核兵器まで口に出しています。

元総理大臣ともあろう方が、「核兵器の共有」を議論すべきだと突拍子のないことを言い出しました。呆れてしまいますが、議員の中には「議論すべきだ」と言う人が一部居ることも確かなようです。

ウクライナの人は子ども・女性・お年寄りには国外に逃げるようにして、成人男性の中には女性も、国を護るため、兵に志願したり、自分たちで火炎瓶を作って応戦しております。ベラルーシを除く隣国の人は、

無条件でウクライナの人々を受け入れ、一年の生活を保障したりして、支援しております。また、各国から武器や支援金を、義勇兵を募らせています。一刻も早く、この戦争が終わることが第一なのですが、これも「仕方ない」で済ましている私です。

ウクライナのゼレンスキー大統領が、「世界は見守るだけでなく、助けてください」と呼びかけました。胸に伝える言葉です。各国で日本でも在日ロシア人も含めて、戦争反対のシュプレヒコールが沸き起こっています。それにも参加していない私です。ただ口で「世の中、安穏なれ」と唱えるだけで行動しようとしていない私は、「仕方ない」と言った一般のロシアの人と何も変わらないのかもしれない。

聖徳太子は、『憲法十七条』の二で、「篤く三宝を敬ふ。三宝は仏・法・僧なり。すなはち四つの生れの終りの帰、万の国の極めの宗なり。いつの世、いづれの人か、この法を貴ばざらん。人はなほだ悪しきもの鮮し、よく教ふるときはこれに従ふ。それ三宝に帰りまつらざるは、なにをもつて枉れるを直さん。」十では「忿を絶ち、瞋を棄てて人の違ふを怒らざれ。人みな心あり、心お

のおの執ることあり。かれ是んずればすなはちわれは非んず、われ是みすればすなはちかれは非んず、われかならず聖なるにあらざる、かれかならず愚かなるにあらざる、ともにこれ凡夫ならくのみ。是く非しきの理、たれかよく定むべき。あひとともに賢く愚かなること、鑿の端なきがごとし。ここをもつてかれの人瞋るといへども、還りてわが失ちを恐れよ。われ独り得たりといへども、衆に従ひて同じく挙へ。」と。親鸞聖人は、『歎異抄』後序で、唯円さんに、「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり。そのゆゑは、如来の御ころに善しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、善きをしりたるにてもあらめ、如来の悪しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、悪しさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします。」と。

プーチンさん、どうか、ご自身を見つめ直してください。自国の人々を世界から孤立させないで欲しい。

現世利益和讃について

四首目

なもあみだぶつ

南無阿弥陀仏をとなふれば

よ りやく

この世の利益きはもなし

るてんりんね

流転輪廻のつみきえて

しょうこうちゅうよう

定業中天のぞこりぬ

【現代語訳】

南無阿弥陀仏のお六字にこめられている如来のお心がいただけ、お念仏称える者は、如来の摂取の心光の中に包まれ、明るい人生を賜り、この世の利益はきわまりない。迷いの生死を流転輪廻しなければならぬ罪が消え、生まれつき定まっている寿命であるとか、寿命を全うせず途中で死ぬとかということもなく、寿命を延ばしていただけるのである。

(『聖典セミナー浄土和讃』黒田覚忍師)

【語彙】

定業

①前世から定まっている善悪の業報(決定業(報いを受けると決まっている行為))

・ 反対語 不定業(日蓮宗の教学用語解説)
②念仏四業の一つ。禅定に入って仏を観ずることをいう。 『仏教語大辞典』

念仏四業

・ 定業 定心で仏を観ずること

・ 散業 散心で仏を観ずること

・ 有相業 仏の相好を観ずる、あるいは仏の名号を観ずること

・ 無相業 仏の身土は非有非無であること
を観じて、第一義に入ること

『浄土宗大辞典』(往生要集)

正定業

・ 阿弥陀仏を対象として行う正行のうち、称名念仏を正定業、読誦・観察・礼拝・讚嘆供養を助業という。

『日本国語大辞典』(選択集)

・ 「本願名号正定業」(『正信偈』)

親鸞聖人は、私が称える念仏のことではなく、阿弥陀様の「本願のはたらき(他力)」を正定業と表わされておられる。

この度の「定業」は①の意味であり、前世から定まっている善悪の業報を意味します。言い換えれば「さだめ」と言われているものです。

日蓮宗さんの「教学用語解説」ではありませんが、「定業・不定業」について、次のように解説されています。

親鸞聖人と同時期に教えが広まった日蓮

宗も災害や戦争で多くの方々が理不尽にも亡くなっていく現実において、人々を救う教えを説いておられたことでしょう。その一つである「定業」をどう捉えておられたかを知ること、親鸞聖人の「定業中天のぞこりぬ」の意義を考える参考にしてみたいと思います。

定業・不定業

「定業」とは、過去の善・悪の業因によって果報を招くことが決定した業をいい、「不定業」とは、果報を招くことが決定していない業をいいます。

この「定業」「不定業」の区別には、第一に、果報を受けるか受けないかによって分ける場合があります。

これは、今生における身口意にわたる善・悪の業が、重い業か、軽い業かによって、受・不受を分けるものです。

重業の原因としては、強い煩惱、または善心によって深く思惟した結果なされた業また、父母などの恩あるものや、仏法僧のような功德のあるものに対してなされた業などがあり、これらに対する行為や言動は善につけ悪につけ定業となります。そしてこれ以外のものは軽い業であり、不定業となります。

第二に、果報を招く時が定まっているも

のと定まっていらないものを分ける場合があります。

これには、順現法受業・順次生受業・順後次受業の三種があります。

順現法受業とは、現世に業を作って現世に果を受けること。順次生受業とは、今世に業を作って次の生に果を受けること。順後次受業とは、今世に業を作って三生以後において果を受けることをいいます。

そして第三に、果報と時がともに定まっているか否かによって分ける場合があります。

これには、異熟定・時分定・俱定・俱不定の四種の業があります。

異熟定とは、果を受けることは決まっているが、時は不定であること。時分定とは時は定まっているが、果を受けることが定まっていらないこと。俱定とは、果と時がともに定まっていること。俱不定とは、果と時がともに定まっていらないことをいいます。このように、現在の宿業の中で、前世からの業によってすでに定まって改変することができないのが「定業」であり、自他の功德や善業によって改められるのが「不定業」です。

「不定業」は当然のこと、「定業」をもよく転じ、幸福な境界を得るためには、日蓮大聖人の仏法によらなければなりません。

大聖人は、『可延定業御書』に、

「業に二あり。一には定業、二には不

定業。定業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す。何に況んや不定業をや」

(御書七六〇頁)

と、人の智慧では計り知ることのできないまた転ずることのできない「定業」も、佛法の不可思議の功德によって救われる、と仰せられています。

つまり、「定業」に苦しむ人が、深く過去の謗法罪を懺悔し、日蓮大聖人の御金言を信じて三大秘法の御本尊を受持し、南無妙法蓮華経と唱えるところに「定業」を転ずる大功德が生じるのです。

「大白法・平成十年一月一六日刊

(第四九三号より転載)

教学用語解説(三四)「

(nombunfujiより)

中天 生存の途中で早く亡くなること。天寿を全うせず、若死にすること。

中有 (中陰・中蘊) 意識をもつ生きものが、死の瞬間(死有)から次の生を受ける(生有)までの間の時期で、靈魂身とでもいべき身体をもつ。生まれる前の暫定的な身体。またこの期間が四十九日であるという説から、人の死後七日ごとに経典を

読誦し、七回目の四十九日を満中陰として死者の冥福を祈る習慣が発生し、俗には、この直、亡魂が迷っているといわれる。

『仏教大辞典』

定業中天 定業は造った業に依じて定まる

寿命のこと。中天はその寿命をまっとうせずに早死にすること。

『浄土和讃を読む』(白川晴頭師著)

のぞこりぬ あるものが消えてなくなるのではなく、河川の水が海に流れれば海水と成って一味になるように、そのまま他のものに転じ変えられていくこと。

『浄土和讃を読む』(白川晴頭師著)

※親鸞聖人がお使いになられた「のぞこりぬ」の例文

・清浄光明ならびなし

・遇斯光のゆゑなれば

・一切の業繋ものぞこりぬ

・畢竟依を帰命せよ (浄土和讃)

・一形悪をつくれども

・専精にこころをかけしめて

・つねに念仏せしむれば

・諸障自然にのぞこりぬ (高僧和讃)

・ゆゑに知んぬ、円融至徳の嘉号は悪を転

じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は疑を

除き証を獲しむる真理なりと。

(教行信証 総序)

・除疑獲徳の神方、極速円融の真詮、長生

不死の妙術、威徳広大の浄信なり。

(浄土文類聚鈔)

・一声称念するに罪みな除こると。微塵の

故業と随智と滅す。覚へざるに真如の門に

転入す。(教行信証 行文類)

・名を称すればすなはち罪消滅することを得。

凡夫もし西方に到ることを得れば、曠劫塵沙の罪消亡す。六神通を具し自在を得。永く老病を除き無常を離る。(教行信証 行文類)

・唯除五逆 誹謗正法(『仏説無量寿経』第十八願文・成就文)

・具足十念 称南無無量寿仏 称仏名故 於念々中除八十億劫生死之罪(『仏説観無量寿経』)

・よろづの有情の汚穢不浄を除かんための御ひかりなり。淫欲・財欲の罪を除きはらはんがためなり。このゆゑに清浄光と申すなり。

(弥陀如来名号徳)

・よろづの有情の瞋恚・憎嫉の罪を除きはらんとために得たまへるひかりなるがゆゑに、歡喜光と申すなり。
(弥陀如来名号徳)

この中、『仏説無量寿経』の「唯除」は、「抑止文」と言われ、五逆や正法を誹謗する者は、救いの対象から除かれるというのではなく、あくまでも罪の深さを述べられたもので、そういう者(罪悪深重の凡夫)こそ救いの対象であったことに気づかしめる誓願であることを親鸞聖人は理解されました。

「除く」の対象は、「疑い」「罪」「老病」「諸障」に当てられてあります。「罪」には「消滅」「滅」も使われています。

また「転ずる」の対象は、「悪」であり、総序の文には「円融至徳の嘉号は悪を転じて徳を成す正智」とあり、「現生十種の益」には

「転悪成善」とあります。

先号の「現世利益和讃」第三首では、「一切の功德にすぐれたる 南無阿弥陀仏をとなふれば 三世の重障みなながら かならず転じて軽微なり」ともあり、重障が軽くなることを転ずると表現されています。

尚、「真如の門」に入ること「転入」とも表現しております。

「除く」と「消滅すること」と「転ずること」とは、同じ意味というより、阿弥陀さまの連のはたらきを言い表しているように思えます。

お念仏する者には定業や中夭という現象は無くなるということではないと思えます。

金子大榮師は『現世利益和讃』は個人の利益(自利)の立場から詠っているのではなく、この世の利益(他利)のことであり、お念仏申す者の心構えを詠ったものだとおっしゃっております。

私どもは、不治の病に罹れば、「どうして私が…」「何も悪いことはしていないのに…」と嘆いたり、幼く、若くして亡くなった方のことを聞けば、「まだ若いのに」「かわいそうに…」とか、災害、事故で亡くなれば、「運が悪かった」「運命だった」とか思いがちであります。悲しく辛い事実であることに変わりはないのです

が、南無阿弥陀仏を申し合う間柄には、「定業」「中夭」という言葉・考え方に束縛されず、迷わなくなるということが「利益」であることを詠ったものではないでしょうか。

臨終の一念で、この世の寿命は終わります

が、続いてお浄土でその寿命は無量になっていくという「延命」(第二首)があるのでしよう。

このことは、浄土真宗に「中有(中陰)」の考え方がないことに通じております。

よく七日七日ごとに仏に近づいていき、四十九日目(満中陰)を迎えて、仏さまに成ると言われますが、浄土真宗では臨終の一念で、お浄土に生まれ仏さまに成らせて頂くのであり、七日七日は遺された者に必要な時間なのだと思えます。

人は、それぞれ、生まれた時から決まった寿命があるわけではありません。「運命」というものは本来ないのです。

そのことを「一声称念するに罪みな除こる」と。微塵の故業と随智と滅す。覚へざるに真如の門に転入す。」と『教行信証(行文類)』には説かれています。

「微塵の故業」とは、無数の古い業、無始以来の悪業のことで、「随智」とは、自力の智慧のこと、つまり、私どもが考える運命論(定業・中夭)のことです。

不真実である私どもの知恵を清浄なる阿弥陀さまの智慧の光に照らされ、間違いであると気づかされるのではないのでしょうか。

先述の日蓮宗さんの「定業・不定業」の解説では、お題目を唱えれば定業・不定業が転ずるとはありましたが、どのように転ずるかは説かれていませんでした。もしかすると日蓮さん自身は説いておられるかもしれませんが。

親鸞聖人御誕生八五〇年

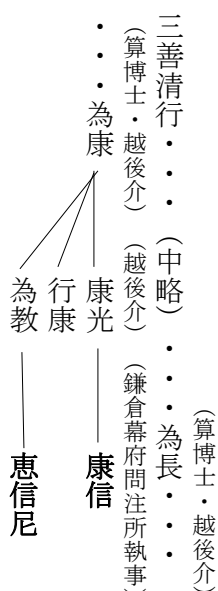
立教開宗八〇〇年

慶讃法要 企画

親鸞聖人を知ろう

④三善氏とは？

三善氏というのは帰化人系の氏族とされています。それも朝鮮半島の高麗から来た人々と、中国の漢族に由来する人と二つの系統がありました。しかし平安時代に三善清行という大学者で政治家でもあった人が出てから、この二つの系統の三善氏は、その後いづれも清行を先祖として崇拝するようになりました。



⑤三善清行

承和十四年(八四七)生
延喜十八年(九一九)没

清行は昌泰三年(九〇〇)に文章博士(もんじょうはかせ)に、その翌年には大学頭(だいがくのかみ)となりました。文章博士というのは貴族の若者の教育機関である大学で中国の古典を教える教授です。この学問を紀伝道といえます。大学頭は大学運営の責任者です。政治的な能力もなければ務まりません。また清行は醍醐天皇に「意見封事十二箇条」を提出して、地方政治の乱れを改善するように上申したことで知られています。

三善家は中級の貴族です。彼らは、誰か人事権を握る上級貴族に取り入らないと絶対に官職はもらえません。清行は左大臣藤原時平の保護を受けていました。時平が延喜元年(九〇一)にこれまで大学者で政治家でもあった右大臣菅原道真と争い、九州の太宰権帥に追いやっった時清行が時平のために大いに働いたそうです。

⑥三善為長

寛弘四年(一〇〇七)生
永保元年(一〇八一)年没

清行の子孫に三善為長という人物がいました。彼は算博士(さんはかせ)で、越後介など数カ国の介(国司の次官)も歴任しました。算博士は、大学で算道(数学)を教える教授です。為長は算道の大家として知られていました。

⑦三善為康

永承四年(一〇四九)生
保延五年(一一三九)没

為長が越後介であった時、隣の越中国の豪族射水(いみず)氏のまだ十代の、向学心に燃えた若者が為長に憧れました。数年後その若者は京都に上がって為長に入門しました。為長はその若者があまりに算道その他法律、仏教学等に優れているので養子にして跡を継がせました。それが三善為康です。系図の上では恵信尼さまの祖父に当たります。

為康も算博士および越後介に就任しています。ただ地方出身の養子だったためか、出世はとも遅れました。その分、為康は法律を勉強して中級官吏として生きて行く方向も模索しました。平安時代の詩文や公私の各種文書を分類して何冊もの本にしました(『朝野群載』)。この本は役人たちが先例を調べたり、文書を作成したりする時にとっても便利でした。今日でも平安時代の行政を知るために必須の史料なのです。

また、官職や政務・儀礼を辞典的に解説した『懐中曆』と『掌中曆』があります。現在では失われているのですが、鎌倉時代に両書をもとに編纂された『二中曆』が残っています。数学書として『三元九紫法』、仏教書として『拾遺往生伝』『後拾遺往生伝』『六波羅蜜寺縁起』『叡山根本大師伝』その他があります。為康の子孫は、為康の敷いた路線、すなわち学問(算道)と政治補佐(法律)を家の特色とし、その習得に懸命に励みました。

⑧為康の観音信仰

為康は幼少のころから観音菩薩を熱心に信仰していました。そのために如意輪観音の大呪を何度も唱えたといえます。「大呪」というのは長いや短いなどいくつもある呪文のうち、長い呪文のことです。天仁三年(一一一〇)、六十二歳以降は一日に千回唱えたそうです。

⑨為康の五十代からの阿弥陀信仰

為康は三十歳ごろから阿弥陀信仰に目覚めたようですが、本格的に信仰し始めたのは五十歳を過ぎてからです。毎日念仏を一万回称えたそうです。四十九歳の時、生涯を終わって死のうとする時に阿弥陀如来が諸菩薩を連れて迎えて来てくれた夢を見ました。しばらくして難波の四天王寺に参籠し、その夢が正しいことであると確認して、ますます念仏を熱心に称えるようになりました。また、念仏を称えて極楽往生した人のもとを訪ね、その伝記を調べて『拾遺往生伝』・『後拾遺往生伝』を編んでいます。為康は八十二歳以降、毎日、『般若心経』三巻・念仏一万遍・『阿弥陀経』九巻・『金剛

般若経』三卷・如意輪菩薩の「大呪」千遍・『阿弥陀経』九巻の誦誦を行いました。

⑩為康の信心の念仏

保延五年(一一三九)六月三日、為康は病氣になり、起き上がることができなくなりました。九十一歳もの高齢になっていました。「間もなく臨終を迎えそうなので、念仏のみを行うこととする」。このように為康は言ったそうです。すると息子の行康が、「出家・持戒は法器に協(かな)ふ可きか。如何。」(『本朝新修往生伝』)「出家して授戒してもらえば、その功德によつて極楽往生できると思います。如何でしょう」と為康に勧めました。

貴族たちは大病したり臨終が近くなったりすると出家することが一般的でした。出家するということは、現世の職などを捨てて釈迦の弟子になるということの意味します。それは大きな功德があり、大病が治り、あるいは極楽往生が期待できるとされたのです。為康がいつこうに出家の話を持ち出さないで、行康は心配だったのでしよう。すると為康は、断然、次のように返答しました。

「往生極楽は信心に在るべし。必ずしも出家に依るべからず。念仏の功(く)積もりて、畢命を期となさば、十即十生、百即百生なり(極楽へ往生するためには信心が大切です。出家することだけでなくもいいのです。信心にもとづく念仏を一生の間称えていけば、十人が十人、百人が百人、全員がすぐさま極楽往生します)」。為康は出家による極楽往生を断然拒否し、信心による念仏を選んだのです。法然の専修念仏説にもとづく信心と同じではないにしても、平

安時代にこのように信心を強調した記録を、私は見たことがありません。

為康はその年の八月四日の夜に亡くなりました。親鸞聖人は九十歳で亡くなりましたが、為康はそれを一歳越えた年齢ということでした。普通の人の平均寿命は四十代の前半ですから、その二倍以上の人生を生きたことになりました。為康は『拾遺往生伝』や『後拾遺往生伝』を編んだ熱心な念仏者として当時の貴族社会で知られていましたから、その「信心の念仏」はさらに強い印象を与えたと思われます。

このような信仰は家の伝統にもなっていないまま。まさに為教・恵信尼と続く三善家は、その伝統を承けていたと推定されます。

⑪為康と黒谷の念仏者

為康はまた、比叡山黒谷の念仏者とも親しかったのです。『拾遺往生伝』に、次の文が引用してあります。

「保安四年、台嶺黒谷の聖人淨意、魯山の朱鉞、弟子為康、合力してこれを撰せり。(保安四年、比叡山黒谷の念仏僧である淨意、京都大原の朱鉞、それから私為康が協力してこの本を編集しました。)」

「この本」というのは、『後拾遺往生伝』であるという説が有力です。黒谷には教団の組織からはずれた念仏僧が多く住んでいました。魯山とは京都の大原で、ここにも念仏僧が大勢集まっていました。為康は黒谷や大原の念仏者たちと親しかつたのです。親しかつたから彼らと本の編集ができたのです。

念仏者たちは生活のために貴族たちから寄付をもらわなければなりません。教団から離れて

自由に生きることが出来る彼らは、その代償として自分で生活費を稼がなければなりません。為康が彼らと親しかつたということは、彼らに生活費を与え続けているということでした。

黒谷から親鸞聖人の師匠である法然聖人が出ていることを忘れるべきではないでしょう。黒谷の念仏僧は何百人、あるいはそれ以上いた気配です。その念仏僧は、外から見たらすべて黒谷聖人です。それなのに、浄土真宗で黒谷聖人といえば法然聖人のみを指します。興味深いことです。

⑫三善家と法然聖人

文治五年(一一八九)、法然聖人は摂政九条兼実(かねみ)に招かれて念仏の教えを説きました。誰が兼実に法然聖人を紹介したのか、まだ分かっていません。建久九年(一一九八)、法然聖人は兼実の要請で『選択本願念仏集』を著わしました。その三年後の建仁元年(一二〇一)、親鸞聖人が法然聖人の門に入ったのです。

ところが、恵信尼書状第三通により、恵信尼さまは親鸞聖人より先に法然聖人の教えを受けていたことが推定されます。このとき恵信尼さまは二十歳です。妙齢の貴族の女性が一人で教団をはずれた一介の念仏僧のもとに教えを受けに行くことは考えられません。つまりは三善為教一家が法然聖人の教えを受けていたということなのです。

すると、祖父為康と黒谷の念仏僧たちとの親しい関係を考え合わせると、法然聖人を九条兼実に紹介したのは三善為教であった可能性もあるのではないかと私は考えています。

(つづく)

稱讚寺 行事予定

二〇二二年 三月の行事予定

春季彼岸会 法要

ご案内

編集後記

六日(日) 日曜礼拝 午前十時
のんのん法話会 午後二時

一三日(日) 日曜礼拝 休座

一六日(水) のんのん法話会 午後二時

二〇日(日) **春季彼岸会 午後二時**

二六日(土) のんのん法話会 午後二時

二七日(日) 日曜礼拝 午前二時

※朝のおつとめ

午前七時

※夕のおつとめ

午後六時



なければないうで

苦しむ

あればあれで

苦しむ

二〇二二年「心のともしび」三月カレンダーより

新型コロナウイルス感染症が蔓延してから三回目の春のお彼岸をお迎えいたしました。まだまだ、三密を避け、日常、マスクをしないと出歩けない状況であります。春は近づいているようです。

当寺では、左記の日程にて、「春季彼岸会のご法要」を行います。

お時間、体調がよろしかったら、どうぞ、お参りになつてください。

日時 三月二十日(日)

午後二時

日程 一四〇〇 おつとめ

・御本典作法

・仏説阿弥陀経

一四五〇 休憩

一五〇〇 おはなし

一五四五 恩徳讃

一六〇〇 解散

去る二月十六日は、母の九十歳の誕生日でした。新型コロナウイルス感染の中、帰省することをためらっておりましたが、国内移動にはそんなに規制が厳しくないことから、母の卒寿のお祝いで帰りました。

母には内緒で、私と姉と甥が、ヒョッコリと二年ぶりに居間に現れたときの母のキョトンとした顔が今も思い出されます。

卒寿の当日は、お飾りして、孫たちからもお祝いの品やメッセージが届き、手作りのケーキもあつた食事会になりました。

涙もろい母は、泣きながら嬉しくしてくれていました。金さん銀さんが百歳のお祝いで、「嬉しいやら寂しいやら」と言われたように、「〇歳になったみたい」の母の言葉にも、そんなことを感じました。

翌日、母からお礼と言つて一人ひとりに渡してくれました。

恩を返すことも出来ず、恩に報いることも出来てないなあと、

いつまでも母父の子であることを、情けなくとも喜んでいる私です。多少、帰省で周りに迷惑を掛けたようですが、逢いお祝いで

送る環境である生活を送れていることをありがたく思うことです。

